

BeNews

2008 SPRING

別府大学通信 NO.96

伝統を踏まえて新時代を拓く	2
国際経営学部を新設、文学部は改組	3
「泉都の文化論 - 町と大学の未来を語る」	
創立100周年シンポジウム	4
200周年に向けての別府大学アーカイブズ	8
人気アニメーション『おでんくん』を立体講演	10
マンガ・アニメ講演シンポも滅多に聞けない	
巨匠の話がいっぱい	11
「世界遺産への道」で文化財セミナー	14
公開講演会 織田作之助の世界	15
在来種・小判大豆の新商品開発と産地づくりに挑戦!	16
別府大学と三和酒類の共同研究がスタート	17
食物栄養学科の挑戦「健全な食習慣の育成」	18
「大分香りの博物館」開館	
駐日フランス大使が記念植樹	19
The fruits of my one-year study programme in Britain	20
日本語弁論大会で洪さんが最優秀賞	22
「進路支援システム」が学生支援GPIに	24
進路情報センターから	27
国際セミナー(冬期)食物栄養科学生と	
国際セミナー留学生との交流会	28
保育科学生のオペレッタ	29
青空に揚がった風、風、風	29
第27回ミュージックフェスティバル開催	30
「ヒロミチお兄さんと遊ぼう」	30
スポーツ、芸術・文化の奨励賞	31
明豊だより	32



「ふるさと(早春)」西村 駿一

伝統踏まえて新時代を拓く

学校法人別府大学理事長 西村 駿一

21世紀は知識基盤社会の時代と提唱されるなかで、「心の教育」や「創造性に富む人間の育成」等を柱とする教育改革が具体化する新しい時代に入ってきました。本学も建学の精神『真理は我らを自由にする』を柱に、輝かしい伝統を踏まえ、地域に根ざした教育・研究や国際教育の推進により、個性豊かで国際感覚を身につけた人材の育成を目指しています。

本学は明治41年（1908年）大分市に豊州女学校を創設以来、本年5月で100周年を迎えることとなりました。明治、大正、昭和、平成の激動する時代にあって常に私学の灯を掲げ、ひたすら地域社会に貢献できる人材を輩出してまいりました。

その間、短期大学部、中学・高校、小学校、幼稚園、保育園、看護専門学校を付設し、学生・生徒・児童・園児数は実に5600人を超えました。また、地域に開かれた大学として施設も充実し、大分市に大分キャンパスを開設、放送大学大分地域学習センターを誘致、さらに芸術文化の殿堂にふさわしい文化ホールとセミナーハウスを建設しました。学生と地域の人々の要望を満たすべく、JR日豊本線に別府大学駅を実現するとともに、そこに国際交流会館を設けました。宇佐市に宇佐教育研究センター、日田市に日田歴史文化研究センター、湯布院に研修センターと「ゆふの丘プラザ」を開設いたしました。一昨年完成した別府大学メディア教育・研究センターはテレビスタジオや最新鋭の機材をそろえた200席のホールを持つ意欲的な施設になりました。

別府キャンパスの隣接地に出来上がった「大分香りの博物館」は大分県の財産である世界の香水の集大成を公開・展示するだけでなく、香りの調合やマンガ・アニメを体験

できる参加型の新しい博物館として脚光を浴びております。

教育課程の面では、この10年間に大学院を立ち上げ、その充実に努めてきました。平成9年（1997年）に大学院文学研究科歴史学専攻、翌10年に日本語・日本文学専攻、11年には文化財学専攻を開設し、13年4月、文化財学専攻に博士後期課程が出来るに至りました。

平成14年（2002年）4月、食物栄養学部食物栄養学科を開設し、長年の懸案であった複数学部を実現しました。16年には大学院に臨床心理学専攻を加え、さらに18年4月、食物栄養科学研究科食物栄養学専攻を設けました。同時に、食物栄養学部を食物栄養科学部に改め、食物バイオ学科を新設しました。

この間、美学美術史学科を芸術文化学科に改組し、視覚伝達デザインコースとマンガ・アニメーションコースを設置する、また、文学部に人間関係学科を開設するなど、社会的ニーズに対応して大学改革を展開してきました。外国人留学生のための別科日本語課程も充実し、国際化に寄与しています。

短期大学部においては、平成16年4月、ビジネス・情報・観光・福祉の4つのコースを選択できる地域総合科学科と、社会的ニーズに沿った保育士養成施設として保育科を設置しました。

豊かな人間性の育成のため、高等学校・中学校・小学校・幼稚園・保育園および看護専門学校の一層の充実を図ってまいります。

本学は今後とも、国際化、情報化や生涯学習の社会的要請に応えるための改革に努め、新しい展開を期してまいります。時代を拓く別府大学の取り組みに皆様のご支援とご助力をお願いします。

国際経営学部を新設、文学部は改組

2009年4月に別大新世紀

別府大学学長 西村 明

学園創立100周年を記念する事業の中で最大のものは時代の要請に応える文学部の改組と国際経営学部の新設です。2009年4月(平成21年)の開設を予定し、文科省への手続きを進めております。

学部の創設は、02年度に食物栄養学部(現在の食物栄養科学部)を設置して以来のことです。文学部の改組と併せ、別府大学の新世紀を拓くとともに、本学を志す多くの高校生のみなさんに新しい進路を提供する確かな道となるものです。

国際経営学部は企業や官公庁のみならず、さまざまな非営利組織(NPO)、個人経営の事業体のいずれにあっても必要とされる事業経営と組織管理の知見を獲得し、国際的な活躍を可能にする外国語能力を身につけて実社会に出て行くための場となります。

そこには国際経営学科を開設する予定です。経済学や法律学、会計学などの基礎固めから始め、特に簿記、会計、観光の実務に通じる力を育てて卒業を迎えてもらいます。1年次から演習を導入し、少人数で積極的な学習を促して知的探求心を培います。基礎教養、専門基礎、応用・創造教育へと、年次が上がるにつれてより高度なカリキュラムになっていきます。このような教育システムを踏まえて、専門的な知識と技術を修得するために、国際経営コース、会計・税理士コース、観光コースを設けるよう考えています。

アジアとつながりの深い九州から人材を送り出す新学部ですので、4年間にわたって英語によるコミュニケーション能力を鍛えるのはもちろん、アジアの言語を日常生活に不自由のない段階まで学ぶことをひとつの特色とします。

卒業後に仕事で必要に迫られたときに、「私は韓国語ができます」「中国語は大学でやったからなんとかできます」と進んで手を上げることが出来るようになるのが狙いです。

広い視野と知見を持った国際的な人材の育成という点で、文学部の改組は国際経営学部の創設と通じるものがあります。別府大学は前身の別府女子大学の時代から文学部を核として歩んで来ました。そのなかで、常に時代と社会の要請に目を配り、芸術文化学科、文化財学科、さらには福祉や心理学を学ぶ人間関係学科と、改組や新学科の開設に努めて、世に送る人材の幅を広げてまいりました。それらの卒業生が社会のあちこちで多彩な活躍をしていることは100周年を意義深いものにしていきます。

今回の改組は、そうした伝統を活かしつつ、専門分野の基本的学識のみならず、広い視野で学際的な諸問題を解決する能力を持った人材を育てようとするものです。具体的には、史学科と文化財学科を束ねて「史学・文化財学科」とし、また、国文、英文、芸術文化の3学科を統合して「国際言語・文化学科」に改めます。

「史学・文化財学科」には世界史、日本史・アーカイブズ、環境歴史学・文化遺産学、考古学・文化財学の4コース、「国際言語・文化学科」には日本語・日本文学、英語・英米文学、芸術、国際文化の4コースを設置します。両学科とも、3、4年次に副コース制を導入して、複数のコースの専門的学問を修得出来るようになるのが大きな特徴です。

改組後はこれら2学科が人間関係学科と並んで、文学部は3学科制になります。

新時代の別府大学にご期待ください。

「泉都の文化論 町と大学の未来を語る」 創立100周年記念シンポジウム



「別府の文化とその歴史」をテーマに10月から1月まで12回に亘った公開講座「泉都物語」の締めくくりとして、創立100周年記念シンポジウム「泉都の文化論 - 町と大学の未来を語る」が1月12日土曜日、3号館ホールに300人を超す聴衆の参加を得て開かれた。挨拶に立った西村明学長は「別大の歴史を顧みると、草創期には女子の高等教育に特に力を入れた。しかもそれを大学にしていっていったところに高い教育理念が伝わってくる。伝統を引き継ぎ、『真理は我らを自由にする』という建学の精神を活かして地域に密着しながらも、新しい教育と研究の成果を世界に発信できるようにしていくことが肝心だ」と抱負を述べた。

学校法人別府大学の西村駿一理事長が基調講演に当り、別府キャンパスができたころをふり返って「大学通りは



本学理事長
西村 駿一氏

石ころ道で、まるで河原のようだった。古い建物には幽霊が出るという噂もあった」と切り出した。そういう貧しい環境でも「教育は私学がやるべきだ。研究は私学があつてこそ進む」との創立者・佐藤義詮先生の精神のもとで地域に根ざして発展してきたので

あり、創立80周年の折りに“veritas liberat”という建学の精神をラテン語で刻んだ小さな歯車型のバッジを定めた意義を紹介した。「教員も職員も学生も、一人一人が歯車のようにかみ合ってどんどん回転していくことで地域を変え、日本を変え、世界を変えていく力になっていく。1人では教育も研究もできない。チームをつくり、そのチームが力を発揮していく」

「我々は21世紀をどのように創造していけるか。単に科学的に考えるのではなく、人間の精神、哲学を考えていくのがすべての教育、研究の真ん中でなければならない。大学で学ぶということは、創造の力を培うことだ。積極的感動の心が大事だ。専門書以外に他の分野の専門書をどれだけ読むか。自分の心をつくり、それが社会にどう反映されていくか、そのことが地域社会、国際社会に出て行く精神でなければならない」

「この大学で学んでよかった、この先生に出会えてよかった、この学生に会えてよかった。そう思える人になって

もらわなければならないし、それは、己の心があって初めて達成される。それを助けるのが学園である」

要旨以上のような基調講演のあと、シンポジウムに移った。パネリストは別府市出身の文化活動家として知られる浅見神社宮司の神(こう)日出男氏と、湯布院の玉の湯社長でNPO法人「ツーリズムおおいた」会長として活躍中の桑野和泉氏、本学の西村理事長、篠藤明德・人間関係学科教授の4人。文化財学科の飯沼賢司教授の司会で、別府という町への思いを語ることから始まった。



本学教授
篠藤 明德氏

篠藤氏「生まれも育ちも別府。駅から歩いて5分のところで暮らした自称・別府のシティーボーイだ。ある講演でそう言ったら、『先生の家は駅裏ですね』と言われた。町の子は駅表でないとだめで、駅裏は田舎っ子ということだった。20

代の終わりにドイツに行って16年暮らし、いまでも時々ドイツに行って外から別府を見ている。向こうで感心するのは再開発するときには歴史的な風景を残さないと連邦政府が補助金を出さないことだ。都市計画づくりに美学や美術史の専門家が加わっている」

「絶対に変えてはならない軸をどうやって判断できるか。心の根本にあるものを守っていく。高度成長の時も、揺

るぎなく文学部を育ててきた。そういう拠点大学としての意義を全国に示そう。こういう大学のあり方はヨーロッパでは常識だ」



ツーリズムおおいた会長
桑野 和泉氏

桑野氏「湯布院はかつて奥別府と呼ばれていた。高校生のころまでは別府はあこがれの地で、別府へ行くというとワクワク感があった。大学は東京で学んで、15年前に戻ってきたが、バブルのあとで外から迎える人たちは減っていった。大

分県の観光は別府が元気でないと生きてこない。どんな時代でもやり抜いてきた別府の底力を感じている。感動を与える町が大事だ。ゆったりとして学び、教養を高めていく。文学の感動は誰でも永遠に持つものだ。その力を別大は担っていると思う」



浅見神社宮司
神 日出男氏

神氏「別府アルゲリッチ音楽祭は今年10周年になるが、何事にも産みの苦しみがあるものだ。別府市にピーコンプラザができたとき、何かソフトを、ということになって(地元出身のピアニストの)伊藤京子さんのつながりでアルゲリッ

チさんが引き受けてくれた。始めは事務局をどこに置くかも大変だった。仕方なく、神社に置いて、足かけ5年

事務局長をやった。文化活動というが、文化はすべから
く政治ですよ、とある方から言われたことがある。その
通りだと思った」

「地方にとってアートは本当に必要なのか。そもそも
地方というものはあるのか。中央と地方の格差といっ
ても、全世界的に見れば日本は総じて中流社会だ。そこ



本学教授
飯沼 賢司氏

はアートのパトロンは行政しかい
ない。そこに少しいびつなものを
感じている」

飯沼氏「民間で動かなければダメ
だったところがポイントと
思う。行政が金を出して何かつく
れば文化ができるということには

ならない。湯布院の歴史もそうではないか」

桑野氏「アルゲリッチ音楽祭が始まったとき、いつか
別府が音楽の町になるといいね、と話していた。それが
すごく新鮮でキラキラしていた。現実には湯布院でも難し
いことだらけだ。私の父たちがドイツに滞在型の温泉保
養地を見学に行ったとき、どこもお金を貸してくれなく
て、結局、農協から借りて行った。行政ではなくて、湯
布院のホテルのオーナーらが『滞在型にするには100
年かかる。だから何もしないのではなくて、今できるこ
とをやっていく』と、子や孫の代を見据えてがんばって
きたからこそ今の湯布院がある」

「湯布院には若い人たちが沢山残っている。1万2000
人の町で後継者が戻ってくる町はなかなかない。町の中
核的な担い手たちが60～70代から30～40代に急速
に若返っている。それが外の人たちに湯布院へ行けば何
かある、東京にはない魅力がある、と感じさせている。
私はそういう町に自信を持っている。次世代に渡してい
けるように頑張っていきたい」

篠藤氏「今の話しを懐かしく思った。ドイツに暮らした
とき、そのバーデンバーデンで州政府の顧問をやっ
ていた。冷泉がちょろちょろと出るだけで、日本ならこれ
でも温泉か、と言われてしまう。その町から友人が来た
際、別府の湯煙を見て、本物の温泉に驚いていた。ヨー
ロッパではアルプス以北に温泉はないに等しく、日本、
とりわけ別府・湯布院には噴出している。こういうとこ
ろに都市があり、町があって、人が住んでいることがヨー
ロッパから来る人にとっては驚きなのだ」

飯沼氏「世界に通じる温泉は大学にも通じる。かつて
詩人のエドモンド・ブランデンが訪れてキャンパスを散
策した。ここを歩くだけでも立派な教育になる、という
言葉を残した。地元で本当に勝負している人の発信した
ものが活力になっている。地域の中で大学はどのような
役割を果たさなければならないだろうか」

神氏「提案がある。別府温泉を世界遺産にする運動を
是非やって欲しい。湯布院と手を取り合って別大が核に

なって運動を起こしたらよいと思う」

桑野氏 「今すぐく学びたい人が増えている。外に目を向けると自分の足下を知りたくなる。教養講座では満足しない。30代の女性は特にそうだ。ここに大学があるということは、大変幸せなことではないか。県民の宝になっていくと思うし、そうなっていかななくてはならない。この地域は地形もよいし、すてきな学生街ができていくのがこれからの可能性だと思う」

篠藤氏 「三浦梅園を見ても、広瀬淡窓を見ても、人格の直接交流なしに教育はない。そういう意味で塾は別大の原点だ」

飯沼氏 「温泉を核にいろんな角度、専門領域から勉強する。温泉は文学者の発信の地でもあり、医療、福祉の場でもある。学内の力を合わせて温泉道を興すことを考えたい」

西村氏 「別府には湯布院のような風情がなくなってきたのが問題と思う。もうければよい、という考え方でやってきたためではないか。これからの観光は、知的なものが入らない限りダメだ。科学と生活との絡み、温泉を利用した食物の扱い方の研究、高温の中で生きる微生物の研究といったことを地域と連携して進めている。大分香りの博物館も知的刺激を与える新しい観光資源だ」

桑野氏 「湯布院が歩いて楽しいと言われるようになったのは最近だ。町の中に人が出ることによって風情が戻っ

た。旅館にサロンをつくったのもよかった。これからは大学がサロンになっていくのではないか。大学がいろんな人を迎えて、それが地域の力になっていく」

神氏 「別府は湯布院の逆ばりで、旅館がお客さんを抱え込んで何でも館内ですませるようにしていたことが裏目に出た。湯布院はオープンにして成功した。それは大学にも参考になる」

篠藤氏 「文化には、いわゆる文化 東京のメディアがつくった文化 というものがある。テレビによく出る人を呼んでくるのが文化だと思うのは間違いだ。別大でずっと古文書を読んでいる先生がいるが、それが文化だ。別大なくして文化なし、と思う」

西村氏 「先日、夕方6時過ぎに帰っていったら、芸術文化学科の学生が卒業制作の絵を描いていた。それを見ながら、制作のことや、画家としての私の気持ちを話した。私は、そういうことのできるのが別大だと思っている。学生が先生たちの研究室をどれだけのぞけるか、先生たちがどれだけ学生に接しられるか。確かに大学はサロンでなければならない。それが町づくりの心になっていけばと思う」

飯沼氏 「まさにこのシンポジウムが一つの大きなサロンと思う。町と大学の未来を開く手がかりとしたい。有り難うございました」

200周年に向けての別府大学アーカイブズ

別府大学の誕生

戦後の学制改革の中で、別府大学は発足地の大分から別府に移り、別府女学院、別府女子専門学校、別府女子大学を経て1954（昭和29）年3月、男女共学の別府大学となりました。

別府でのキャンパスは、1942（昭和17）年に開設された、旧南満州鉄道の傍系会社・華北交通の別府保養所の跡地でした。この保養所は戦後、満鉄の資産とともに接収され、保養所としての機能は喪失していましたが、大陸から引き揚げた旧華北交通関係者などの居留施設に利用されていました。資材不足の戦時中の建築であったことや、管理の不行き届きから、施設は荒廃気味でしたが、別府大学はこの地に以降の発展の基礎を据えたのでした。

別府女学院・別府女子専門学校時代の学園は、終戦末期の国内大都市の荒廃、衣食住難に追われて地方人口が増加。戦時中の学徒動員などで学業に事欠いた女子たちが、「まなび」を求めて施設も不備な新設校に集まり、学園は一時的に賑わいました。しかし、都市の急速な復興と生活の安定によって若者の都市志向が進み始めると、地方大学を志願する学生は漸減し、とくに国文・英文・経済の3専攻で構成された文系大学への入学生は、急速に減少してきました。

大学・短大進学者が増加し始めたのは、戦後10数年を経過した、いわゆる「戦後第1次ベビーブーマー」の時代からでした。別府大学も志願者が急増し、学部・短大の学科の増設・拡充に努め、学部では1963年の史学科の新設となります。

史学科の新設と学芸員カリキュラム

史学科は、当初こそ志願者が定員に満たせませんでした。翌年は倍増し、3年目には定員オーバー。完成年度の67年には、当初の20名の定員が40名に増員され、カリキュラムも急速に充実しました。史学科の当面の目

標は「学芸員・教員の養成」とされ、学芸員では考古学がこなせる専攻生、日本史では記録文書処理に対応できる卒業生を育てることに重点が置かれました。

学芸員志望者には、考古学発掘現場に臨ませると同時に、古文書に強い学生の養成に力を入れるため、乏しい予算を叩いて古文書・記録資料の収集に努め、新博物館の建築に際しては文書収蔵室を準備したほどです。大学附属博物館に、質量はさして高多ではありませんが、若干の古文書史料が集積された機縁です。こうして集められた古文書の整理・分類・目録作成・翻刻などを、古文書・記録史料の学習に熱心な学生が日常的に行い、文書の読解力を養いました。

収集された文書は、近世史の講義や演習にも活用され、整理作業の過程で、専攻生の卒論の素材ともなり、「力作」も生まれました。

別府大学の附属博物館は、54年に開設された上代文化博物館が母体であり、考古遺物主体の博物館相当施設の指定を受けて、世間からもそのように認知されていましたが、内実は、文書記録なども積極的に収集し、教育研究の素材として活用していたわけです。収集は、近世文書ばかりでなく、当然、地域に関係ある近現代史史料にも向けられました。

アーカイブズとアーキビスト

1987年、国は遅ればせながらも、議員立法により「公文書館法」を制定・公布しましたが、別府大学附属博物館では、その頃すでに、博物館（学芸員）と公文書史料（専門職員＝アーキビスト）の関係について強い関心を持っており、市井の古書肆の目録に紹介される郷土に関わる近現代史史料も、予算の許す限り取得する努力をしました。

一方、博物館では、図書館と連携して「大学史」に関わる資料　大学・学部・学科・同窓会などで刊行・出版される研究機関誌・情報誌など　の収集と保管を心

掛けてきました。「別府大学文庫」の設置は、その具体的な現れでしたが、残念ながら諸般の事情から永続できませんでした。

今回、学園創立100周年を迎えるに際し、「別府大学の刊行物」と題する企画展が開催できたのも、過去の積み立てがあったからにほかなりません。

ここ数年、全国の大学・研究機関・自治体などで、いわゆる「公文書」「記録」に対する関心が高まり、アーキビストの養成が急務となりました。別府大学はいち早く05年度に史学科と文化財学科にアーキビスト養成課程を設け、深く学習することができるようにしたのです。本学卒業生には、学芸員・司書資格を取得して、西日本地域の博物館・図書館や文化財行政分野・社会教育施設で活躍している者が少なくありません。この学芸員や司書は最近、急速に進んだ市町村合併などによって採用機会が減り、新しい分野としてアーカイブズとアーキビストが注目され始めました。「学芸員の別府大学」から「アーキビストの別府大学」へと幅を広げたわけです。

別府大学アーカイブズの立ち上げ

アーキビストの養成に関しては、まだ正式な規準が定まっていません。各大学などでは、国立公文書館・国立国文学研究資料館アーカイブズ系や日本アーカイブズ学会などと緊密な連携を取りつつ、養成課程のカリキュラムを試行錯誤しながら、より整った内容のものにするために研究を重ねています。

別府大学のアーキビスト課程でも、アーカイブズ論・同研究、アーカイブズ演習・同実習などの必須科目を設定し、県内外の学外施設と連携しながら、より充実した履修内容を工夫し、優れた資格者の養成に心掛けており、この課程を大学院の専攻に繋げる構想も持っています。附属博物館に所蔵されている古文書・記録などは、学内にあり、日常的に利用できる最も利便なアーキビスト科

目学習資料として貴重な存在です。これらの資料を対象に、整理分類・目録作成・コンピューター入力作業など、教員の指導を受けながら、継続的に熱心な実習作業が進められています。

大学では、本年、創立100周年を迎えるのに備え、各種の学史資料の収集を続けてきましたが、これらの資料を、博物館内の3階フロアーを開放して保存する有機的な施設「別府大学アーカイブズ」を開設する構想を立ち上げました。その過程で創立100周年記念誌を刊行しようとするものです。

この施設は、将来、更に拡充して「別府大学史」を顕彰する根幹資料の管理・保管施設とすべく、法人・大学・短大とその他の付属諸学校の公的記録を保存する機能を持たせる構想になっています。

確立待たれる学園情報の管理

これまで学園内の大学以下の施設では、学校経営・教育活動・学校行事などに関わる文書・機関誌・研究誌・行事記録などが、それぞれの分野で恣意的に管理・保管され、未整理状態に置かれ、ましてや整った収蔵庫さえなく、いざという場合に活用できない憾みがありました。「学校法人別府大学」という教育集団の、幼稚園から大学院までの教育資料、法人・学校事務部門の記録などの散逸の危険や利用の利便を考え、「別府大学アーカイブズ」で集約的に整理・保管・管理し、データ化して利用する態勢を整えることは急務です。現在では、大学創立期の貴重な文書・記録類も、木造建物時代の雨漏りなどで毀損し廃棄されたばかりでなく、各学科などで刊行した研究機関誌の創刊号が欠損するなど、今、僅か1世紀間の大学史の実像を知るための資料さえ、入手が困難な状況に直面しています。別府大学が、「情報化の時代」に相応しく、さらに建学200周年に向けて羽ばたく時、情報の蓄積管理は不可欠な問題です。

人気アニメーション『おでんくん』を立体講演

芸術文化学科教授 白石 邦俊

芸術文化学科は、学園創立100周年記念として、1月22日、メディア教育・研究センター4階のメディア・ホールで「人気アニメーション『おでんくん』を立体講演する」と銘打ち講演会を行いました。

立体講演というのは、ただ「お話し」だけでなく、作品を上映し、観客に楽しんでもらいながら、場面場面のカットはどのように作画され彩色されて仕上げられるかの過程を、ライブで見てもらおうという趣向です。

このため、『おでんくん』のアニメを制作している(株)エッグのスタッフである、プロデューサーの江本徳泉さん、アニメーターの白石悟さん、制作進行の紅一点、中島瞳さんを東京から招き、本学でアニメーションの基礎技術を指導されている伊藤武先生に加わってもらいました。

質・量共に世界一と自他が認める日本のアニメーションは、その文化の底辺も大変広く、全国放送のNHK教育テレビでのシリーズ放映ということもありますが、『おでんくん』のこの別府での人気と知名度は想像以上です。しかし、アニメに関心を持つ人々のほとんどは見る側です。つまり観客です。30分のTVアニメはCMを除き、フォーマットは21分です。当然の事ですが、見る側としては有り体に言えば、21分の放映が終われば、それでジ・エンドです。しかし21分のアニメを制作するには、脚本から完パケまでに約6カ月を要します。つまり、見る時間の1万倍以上の時間を掛けているのです。作画枚数は4千枚、脚本家・監督・アニメーター・背景・彩色・編集そして音響の人たちのすべてを含めると、

僅か1本21分のアニメの制作に関わる者は百名に近いでしょう。

今回来ていただいた『おでんくん』の制作スタッフの方々に、アニメ制作課程の一部である作画・彩色の作業の、それも極く一部分を観客に公開してもらいました。

一般の人がアニメのメイキングを実際に見る機会など、滅多にありません。会場は制作スタッフの作業に熱く反応し、大変盛り上がりました。

『おでんくん』のファン層のほとんどは、5歳前後の幼児から小学生高学年までです。実は講演前、私のところになんと数十人の父母から問い合わせがありました。「6歳になるウチの子は『おでんくん』の大ファンなんです。講演に行って差し支えないでしょうか？」といった確認の電話でした。それに対して私は、「一応、大学の講演ですから、多少はアカデミックな内容になると思いますので、お子さんには退屈かもしれません」と、割に否定的な返事をしてしまい、これが裏目に出てしまいました。その為に、子供たちやその父母のほとんどが不参加で、会場での出足が鈍かったのであせりました。しかし最終的にはそれなりの参加があり、講演内容には充分満足していただけたと思います。特に将来マンガやアニメの仕事を目指している本学の学生は、プロの技とスピードを目のあたりにして、大変感激しておりましたので、この様な形の講演は、大変有意義であったと意を強くしました。

なお、学科長の仲嶺真信教授が開会の挨拶で、こんな二つのエピソードを話されたことを、ご紹介してお

きます。

一つは、わが国画壇の巨匠で、本大学でも教鞭をとられていた宇治山哲平先生（先生は マルシカクサンカク をモチーフにした抽象画で有名）が、居酒屋で手にした串刺しのおでんをつくづくとながめて「何か、自分のような気がする」とつぶやかれていたという話です。もう一つは、この『おでんくん』の原作者である人気作家のリリー・フランキー

さんが、前身が大分県立別府緑ヶ丘高校である大分県立美術短大付属緑ヶ丘高校のOBであるということに、今回の『おでんくん』の講演が偶然でない因縁を感じたということです。仲嶺教授はこれから「私は、この九州の別府大学でのマンガ・アニメーション文化の発展を予感します」という話をされたことを、申し添えておきます。

マンガ・アニメ講演シンポも 滅多に聞けない巨匠の話がいっぱい

「別府をマンガ・アニメの発信地に」を合い言葉に、本学が後押しした別府市・同市教委主催の「別府マンガ・アニメーション講演シンポジウム2007」が10月20日、3号館ホールを会場に4時間余にわたって開かれた。クニ・トシロウのペンネームで有名な白石邦俊教授の長年の友人である藤子不二雄A、ちばてつやの両巨匠がトンボ帰りの強行日程で東京から駆けつけ、虫プロの監督を務めた高橋義輔氏も迎えて、聴衆を引きつける熱い話しが続出した。滅多に聞けない事なので、ここに紹介させて頂く。（当日の登壇順）

クニ・トシロウ先生「48年前、東京オリンピックの4年前に早大法学部の門をくぐった。弁護士になるつもりだったが、漫画研究会というのがあって、つい入った

らそれきり道を外れた。漫画は冷遇されていた時代で、子どもが読んでいると親が『漫画なんか見ているヒマがあったら勉強しろッ』と取り上げた。だから親の目、教師の目を盗んで読んだ。ジャンクフードは食べちゃいけないけど、おいしいでしょ」

「早大を卒業した時に、漫画家になると言ったら、法科を出てそんなヤクザな仕事に就くとは何事か、と勘当同然の目に遭った。それがあの日、今から10数年前、それまで見向きもなかった世間や国が急に振り向いたのです。海外で日本のマンガ・アニメが世界一だ、という評価を受けたからだ。君子豹変す、というが、私は国家を君子だとは一つも思っちゃいないが、まさに豹変した。隔世の感がある」

「今の学生さんたちは、堂々とマンガを開いて、これ

は大学の勉強だ、と言える。というわけで私も今日、この教壇に立っている。そうは言うものの、今日のマンガ・アニメは東京や大阪に集中し過ぎている。別大の学生の才能は東京と比べて何の遜色もない。この原石を磨き育てて、マンガ・アニメを改めてこの別府から発信していきたい。がんばりましょう」

ちばてつや先生 『あしたのジョー』を書く前に『ハリスの風』というのを書いた。ドンガラガッタ、ドンガラガッタというので野球やったり剣道やったり柔道をやったりする。誰からも好きになられる主人公がそれまでの漫画だったが、そういう主人公の足を引っ張っている脇役の方が私は書きたくなって、それを主人公にしよう、と編集長に相談したら、やめなさいと言われた。『ハリスの風』は石田クニマツという主人公が早弁はする、勉強はしない、すぐケンカする、というキャラクターで書き始めたら、えらい人気が出た。どこにでもいる人で、自分に近い、というので真っ先にテレビアニメになった。その最後の方で拳闘部が出てきて、そこで一暴れする話しを考えついた」

「ボクシングのことはあまり知らなかったので、勉強しているうちに作家の梶原一騎を紹介されて、彼が書き、私が描くということで『あしたのジョー』になった。酒が好きでね。原稿の字に勢いのある時はおもしろい。字がよれているのは二日酔いだったのではないかな。少年院とか興行の世界とか、私の知らないことをよく知っていた。クロスカウンターはどうやるとか、ストレートを打つ時は、拳を内側にひねりながら打ち込んで、それ以

上の速さで引っ込めるとか、私にとっては未知の世界がいっぱいだった」

「編集者は二人が水と油だから空中分解するだろうと思っていたらしい。が、そうはならなかった。原作があっても漫画家がそれに乗らないと面白くない」

「ジョーのライバル、力石の顔のモデルはナポレオンだ。あの顔が好きで、いつかキャラクターに使ってやろうと思ってた」

「力石がジョーとリング上で熾烈な打ち合いをやったショックで死に至るという話しなのだが、テレビ局の偉いさんから少年マガジに『死なすのは何とか止めてくれ』と言ってきた。梶原さんと六本木の地下の暗い店で『殺した方がよい』などと相談していたら、誰かがパトカーを呼んじゃった。来る前に止めてもらったけれど。暗いところでも濃い色眼鏡を掛けて、白いマフラーをしている大きな人だった。何か勘違いされた」

「結局、殺してしまったのだが、マンガというのはそのキャラクターの気持ちにならないと描けない。そのころ、べらぼうに多忙で、倒れて医者に行ったら十二指腸が潰瘍でほとんどなくなっていた。仕事を2カ月くらい休んで、別府に来て砂湯に入ってマンガのことはしばし忘れて治したことがある。29歳か30歳のころだ」

「寺山修司さんの発案で講談社の講堂で力石の葬式を出した。私は梶原さんに呼び出されて行ったら、大変な行列ができています。みんな葬式に来てくれた人たちだ。中にはリングが作ってあって、私の描いた力石を黒枠で囲んで飾ってある。お坊さんが経をあげていた。私はただの一度たりともいい加減な気持ちでマンガを描いたこ

とはないが、その時、本当にマンガを描くというのは怖いな、と思った」

藤子不二雄 A 先生 「漫画家というのは一人だ。試験や訓練を受けて、ハイ、今日から漫画家だ、というのではない。自分で描いて出版社に送って、それで使われれば少しお金がもらえる。しかし、それで漫画家かという、そうはいかない。僕は富山で 650 年続いた寺の子だった。昭和 19 年に父が急死して、高岡に引っ越した。そうしたら学校で誰も僕の側に寄ってこない。ノートにマンガの落書きをして過ごした。ある時、のぞくヤツがいて、『お前、うまいな』と富山弁で言った。お前も描くのかと聞いたら、さらさらと描いた。それがものすごくうまい。のちにドラえもんを描く藤子 F の藤本君だ」

「富山は非常な教育県で、本屋にも滅多にマンガ本なんかない。一冊だけあったのを彼と二人で買って公園で見てカルチャーショックを受けた。高岡高校に行ったが、とんでもない進学校で、東大合格ベスト 10 に入っていた。そこで隠れキリシタンのような生活を送った。藤本君は電気工学をやって就職したが、30 分で辞めて帰ってきた。私は富山新聞に入って似顔絵描きをした。映画記者もやって映画評を書いた。そのうち藤本君が『一緒に東京に行こう』と言う。二人だと仕事が来ないときでも気が楽になる」

「日本一古いアパートといわれた常盤荘に入った。手塚治虫先生が初めて入った所で、赤塚不二夫はじめいろんな漫画家があった。チューダーと言ってサイダーに焼酎を 2、3 滴たらしたのを毎日 3 時ごろになると集まって

飲んでいた。ロンメル将軍のセミドキュメンタリーの『砂漠の牙』、ホラーマンガがないころに人食い鴉を描いた『大鴉』、それから『劇画・毛沢東伝』を描いた。長征の研究をしていたのが活きた。依頼が殺到して断ることができない。二人で毎日徹夜状態だった」

「藤本君は本当に純真な人だった。だから亡くなるまで『ドラえもん』を描き続けられた。僕は藤本君やちばさんのように一貫しているのではなくて、いろいろ挑戦した。描き手も一人、読み手も一人で一對一のつながりになる。自分はこのように読みたいが、誰も描いていない。では僕が描こう、と考えて描いた。それがどこかで誰かとつながる。マンガの面白いのはそこだ。マンガは人から教わってやるものでも、やれるものでもない。あくまで自分しか描けないマンガ、自分が読みたいマンガを描くことが大切だ」

「マンガ・アニメ学科がずいぶん方々に出来て、みんながマンガを描くようになったら僕らはやっていけない。ものをつくるとはどういうことを、マンガ・アニメを通じて学ぶ。それが肝心だ。創作は本当にエネルギーを要する。40 代までは私も沢山描いていた。外を出歩くとマンガは描けない。しかし、外へ出ているんな人に会ったということが、僕の場合、活きた。本当は映画監督になりたかったのだけれど、僕はもう死の近い老人なのでね。これからの若い人たちが日本のマンガ・アニメを持って世界中に出て行って、どんどん発展させることはうれしいと思う」

(文責・広報岩村)

「世界遺産への道」で文化財セミナー

文化財学科教授 後藤 宗俊

去る平成 19 年 12 月 15 (土)・16 日(日)の二日間、別府大学創立 100 周年の事業の一環として、第 11 回別府大学文化財セミナー「世界遺産への道」が「地域文化の継承と世界遺産」をテーマに開催された。

いま、「世界遺産」が多くの人々の関心を呼んでいる。わが国では今年度、「石見銀山遺跡とその文化的景観」が新たに登録された。そして、さらに新たな登録を目指す取り組みが各地で進められている。九州を含む西日本の各地でも同様の取り組みが進んでいるが、実は、これらのプロジェクトの第一線の担当者の多くが、本学の卒業生なのである。

これまで、これらの先輩たちと本学教員の間で、個人的には情報交換や研究協力がなされてきたが、そうした中で、これらの関係者が一堂に集まって、「地域文化の継承ということに軸足を置きながら『世界遺産』について集中的な協議をしよう」ということとなったのである。

第一日(15日・土)は、午後4時から、大学の33号館考古実習室で、このセミナーの講師諸氏と本学の教員による研究協議会が、非公開の自由討議の形で開かれた。出席者は、世界遺産への取り組みの第一線に立つ講師陣であるだけに、現場の状況や課題をめぐって白熱した議論が行われ、時間の経つのを忘れるようであった。会場では大学院文化財学専攻の院生、考古学研究室の学生諸君が傍聴したが、本学の先輩と教師たちによる、臨場感あふれる討議には、普段の授業とは違った感銘を受けたようであった。

第二日(16日・日)は、メディア教育・研究センターのホールで、「地域文化の継承と世界遺産」と題して公開セミナーが開かれた。ここではまず、石見銀山資料館長の仲野義文氏が、「石見銀山遺跡とその文化的景観」

と題して銀山の概要、登録達成までの経緯とその歴史的意義などについて講演した。次いで筆者(後藤)が「世界遺産の理念と日本の文化財保護」について話し、世界遺産への道とは、21世紀のわが国と地域の文化財保護・活用の、新しい理念と法の枠組みの構築を目指す道に他ならないことを説いた。

午後の部では、冒頭、本学の飯沼賢司教授が「世界遺産への道：近年の動向と課題」と題して問題提起した。これを受けて、パネルディスカッションが2時間余りにわたって行われた。パネリストとして仲野氏と沖縄県教育委員会の大城慧氏、天草市教育庁文化課の平田豊弘氏、宗像市教育委員会の岡崇氏、阿蘇市教育委員会の緒方徹氏が並び、宇佐市総務部長の小倉正五氏と段上達雄・本学教授が加わった。

会場には、大学内外の研究者や文化財担当者のほか、一般市民や本学学生多数が参加して終日熱心に聴き入った。このセミナーのために用意されたレジュメ(資料集)は、その後も各地の世界遺産関係の業務にかかわる機関や個人から購入の希望が寄せられている。



公開講演会 織田作之助の世界

国文学科教授 重岡 徹

別府大学創立100周年記念として、「心をつめる文学への誘い 歿後60年 織田作之助の世界」なる公開講演会が、平成19年12月8日(土)、別府大学メディアセンターで開催された。主催は別府大学文学部国文学科であり、大分合同新聞社などに後援して頂いた。なぜこのような講演会が別府大学で開催されることになったかという、織田作の名作「夫婦善哉」の続編の生原稿が、このたび鹿児島県の「川内まごころ文学館」で発見され、雄松堂出版より正編と合わせて上梓されたことに発するのである。何と「続夫婦善哉」の舞台は別府だったのだ。

なぜ別府かという、「正・続夫婦善哉」の主人公夫婦、維康柳吉・蝶子のモデルが山市厩次・千代であり、この千代は織田作の二番目の姉であり、昭和9年に山市夫婦が別府に移住し、織田作も数度「ちっちゃいね」(千代のこと)を訪ねたことがあるからなのである。大阪の人である織田作にとって、別府の流川通りは道頓堀によく似ていると映ったらしく、別府を舞台にしたいいくつかの作品にもその旨のことが書かれている。その中でも「雪の夜」などは、心温まる思いに読者を誘いこむ抜群の力を有しており、織田作の人となりをよく彷彿させる名作である。

講演会は、国文学科長の浅野則子教授の挨拶のあと、山本裕一准教授による「正・続夫婦善哉」への簡潔な説明があり、続けて平野資料館館長平野芳弘氏、筆者、大阪のオダサク倶楽部仕掛人井村身恒氏、神奈川大学の日高昭二氏、関西大学の浦西和彦氏の順番でそれぞれの講演、最後に聴講者との質疑応答、というふうに行進した。質疑応答の中で、別府のオダサク倶楽部代表河村建一氏が、これを機会に大阪と別府のオダサク倶楽部のより一層の交流を提案されたのが印象的であった。

それぞれの講演者によるそれぞれの角度からする織田

作論はそれぞれ有益なものであったが、筆者に関していえば、別府に移住してからの山市夫婦が、どこに住んでどういう商売をして、いつ頃まで別府にいたのかあるはずーと別府にいたのか、というような話をしている途中で、突然聴講者の一人が挙手をして、千代さんが新別府病院に入院していた時、自分はその看護をしたことがある、と発言されたのには、びっくりしてしまった。昭和48～49年頃の話であるらしいのだが、残念ながらその後の千代さんの人生については不明のままであった。夫の厩次氏は昭和32年に亡くなっておられるらしいので、残された千代さんの昭和49年以降の人生については、そのうち熱心なファンが解明してくれるだろうと思っている。(追記：千代さんは昭和50年暮れに新別府病院で死去。大谷晃一著「表彰の果て」による)

「続夫婦善哉」には柳吉・蝶子夫婦が、別府で剃刀屋、化粧品店、電気器具店などを商売としたところまでは描かれているが、モデルである厩次・千代夫婦がその後割烹「文楽」、旅館「文楽荘」、甘辛の店「夫婦善哉」などを経営していたことにまでは筆が及んでいない。「続夫婦善哉」以降の千代夫婦の足どり調査に関しては、元別府大学教授松本義一氏の「大分文学紀行」や、先の平野氏、「読売新聞」の中野護氏、「今日新聞」の小野弘氏にたいへん恩恵を蒙っている。とくに小野氏は、別府の千代夫婦に関していねいに調査を積み重ねておられ、いろいろ教示していただいた。ここに記して感謝いたします。

さて、講演会が無事盛会のうちに終了した後は、もちろん反省会なるものが待っているのである。酒を酌み交わしながら、講演された先生方との織田作に関する微に入り細をうがう議論は、これまた愉快極まりないものであったことはいまでもない。

在来種・小判大豆の新商品開発と産地づくりに挑戦！

小判大豆は、江戸時代に岡藩（竹田市）で栽培されていたとされる在来種です。竹田市下志土知地域の平井英一さんが、10年ほど前から細々と栽培してきました。大きさが普通の大豆の約2倍あり、小判大豆と名付けられたのです。数年前の不作で遺伝子が絶える恐れがあることから、「学」の食物バイオ学科を拠点として、「産」からフンドーキン醤油、豆の力屋、マルシヨク、「官」から大分県水田農業研究所および独立行政法人の農業・食品産業技術総合研究機構、九州沖縄農業研究センター、竹田市の産学官が連携するコンソーシアムを結成し、小判大豆の復活と新商品開発に食物バイオ学科の学生が挑戦しています。このコンソーシアムは、講義中心の教育ではなく、講義と実験・実習の有機的な組み合わせによる教育プログラムの構築も目的としているのです。

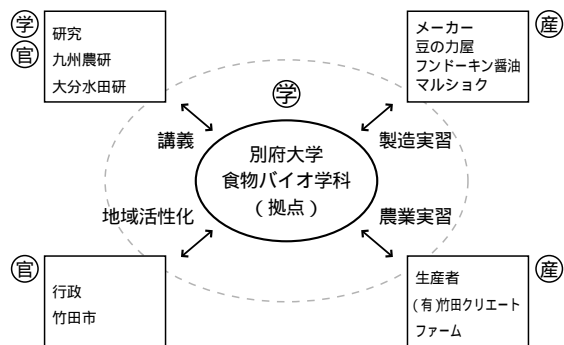
「食」と「農」の連携を目指している小判大豆プロジ



食物バイオ学科教授 森口 充瞭

エクト。地域に根ざした特色ある大豆を活用した新商品開発と地域振興の方策を論議するために、平成19年12月7日、別府大学3号館で別府大学創立100周年記念シンポジウム「地域に根ざした大豆の新商品開発と産地づくりへの挑戦！」（九州沖縄農業研究センター主催、食物バイオ学科共催）が開催されました。「大豆産業クラスター形成に向けた取り組み」と「大豆にかける想いと感謝！」の基調講演があり、続いて開かれたパネルディスカッションは地大豆の地域ブランドを創出することの意義を経済活動、文化、人材の育成の各面から多角的に議論するよい機会となりました。

「小判大豆の掘り起こし」を 教育的立場から取り込む意義



別府大学と三和酒類との共同研究がスタート

別府大学は三和酒類株式会社との共同研究を開始しました。これに先立って2007（平成19）年8月28日、調印式が別府大学でとり行われ、西村明学長と赤松健一郎社長が契約を結びました。共同研究では、地域に密着したバイオテクノロジーを推進します。具体的には別府大学食物バイオ学科教授古川謙介と三和酒類フロンティア研究所長の大森俊郎氏が中心となり、双方向的に研究者を交流しながら2年間研究を行います。その成果として新規な微生物が探索・発見され、新しい醸造製品開発などへの活用が期待されます。



調印を終え握手する西村学長（右から2人目）や三和酒類の赤松社長（同3人目）

食物バイオ学科では三和酒類と3つの共同研究に取組みます！

共同研究調印後、食物バイオ学科は以下の3つの研究をスタートしました。

別府地獄に生息する好熱性微生物の網羅的な探索研究

別府は、我が国はもとより世界でも有数の温泉地帯であり、その源泉数、湧出量はともに日本一を誇っています（源泉数284、湧出量：95kL / 分）。また、地獄と

食物バイオ学科教授 古川 謙介

よばれる温泉の噴出口が多数存在しており、地下250～300メートルから100前後の噴気・熱湯・熱泥を地上に噴出しています。これらの温泉はそれぞれ性質が異なっており、生息する好熱菌も多種多様です。共同研究では別府地獄湧泉水ごとに生息する好熱菌の特性と生態を網羅的に調べ、ライブラリーを構築し、その利用を図ります。

発酵・醸造に関わる酵母・乳酸菌など有用微生物の探索・収集

微生物はさまざまな産業に利用されています。酒、焼酎、ビール、ワインなどの酒類、納豆、漬け物、調味料、乳製品など発酵・醸造食品、抗生物質、ビタミンなどの医薬、農薬、さらにアミノ酸、核酸、有機酸、エタノールなど工業製品の生産、また農作物の成長にも根圏微生物が役立っています。微生物は環境保全にも広く利用されています。微生物がいなかったら地球はゴミだらけ。植物が作る有機物を微生物が分解し、地球の掃除役を一手に引き受けています。自然界は微生物の宝庫です。未だ無数の有用微生物が発見されないまま、眠っています。共同研究ではさまざまな環境から酵母や乳酸菌、環境浄化細菌を探索・分離・収集し、発酵・醸造及び環境浄化への利用を図ります。

進化分子工学と微生物の育種

生命が誕生して36億年、生物は長い歴史の中で環境に適応するため進化を繰り返し、今日の生物界をつくってきました。進化は突然変異がたまたま良い方向に起きたときに成立します。有用な遺伝子進化を試験管内で短時間に効率よく行うのが進化分子工学です。共同研究では微生物の有用遺伝子を進化させ、変異遺伝子プールをつくり、その中から有用遺伝子をつまみ上げ、これを野生株の遺伝子と置き換えて有用な微生物を育種するのです。

食物栄養学科の挑戦「健全な食習慣の育成」

保育園児を対象とした「食育かれっじ事業」

健全な食習慣の育成をめざし、食物栄養学科が大分県と共同で取り組んでいる保育園児を対象とした「食育かれっじ事業」は2年目を迎えた。本年は別府市内の6つの保育園に協力してもらい、3～5歳の246名を対象に食育事業を展開した。県民保健センターの職員、保育園の園長、主任保育士、栄養士、調理士と本学科の教員、学生が本学科実験実習棟で一堂に会し、事業の目標、内容、計画について話し合いを持ったのは7月の初旬であった。まず、昨年実施した調査結果をもとに、アンケート内容を検討し、園児の保護者および保育士に食生活を中心とした生活実態調査を実施した。その結果、園児の就寝時間が遅いこと（夜10時以降に寝る者が60%）、朝食の欠食者は少ないものの（ほとんど食べないが1%、週に2-3日食べるが3%、週に4～5日食べるが5%）、その食事内容は主食のみが40%近くあり、主食、主菜および副菜のそろった食事をとっている者は、わずか6%であることが判明した。そこで、今年の事業テーマを、1つは生活リズムを整えることを目的に「早寝・早起き・朝ご飯」、もう1つは食事内容を考えてもらうことを目的に「赤・黄・緑3つの食品をそろえて食べよう」と定め、テーマごとに園児に栄養教育を実施することとした。

栄養教育は本学科4年の学生たちによる劇形式で行っ

た。2つのテーマに合わせて学生たちが劇のストーリーの組み立てから演出までこなしたのであるが、主役や脇役には子どもたちに受け入れられやすく、また印象に残る様に3人のヒーロー（赤・黄・緑の戦隊衣装およびマスクを着用したヘルシンジャー）と悪役（ガラガラ星人ダラリン）を起用した。10月下旬から11月下旬にかけて6保育園をそれぞれ2回訪問し、劇による栄養教育を実施した。「早寝・早起き・朝ご飯」をテーマにした劇の実演後には早寝早起きを毎日実施できるよう、子どもたちへ劇に登場したヘルシンジャーを掲載した早寝早起き達成度カレンダーを配付した。「赤・黄・緑3つの食品をそろえて食べよう」をテーマにした劇の実演後には、赤・黄・緑のヘルシンジャーの色がそのまま食べ物の3つの色であることを説明し、赤・黄・緑の食品を乗せることができるランチョンマットを配付した。それらを持ち帰った家庭で園児とともに保護者も2つのテーマを意識できるようにとの期待を込めて、学生たちは作成一生懸命工夫を凝らした。その願いが通じてか、後日、保護者から家庭での食生活が改善されたというお礼のメールが大学に届き、一同、大いに喜んだ。何度も繰り返し意識してもらうこと、広く多くの子供たちや保護者に理解してもらうことが園児の食育においては大切であろう。これからも食育の普及にさまざまな形で取り組んでいきたい。（浅田恵彦）



「大分香りの博物館」開館 駐日フランス大使が記念植樹

3000点を超す古今東西の香水セットを網羅した「大分香りの博物館」が07年11月29日、別府キャンパス隣接の旧学生寮・職員宿舍跡地に完成した。観光業界や報道陣の内覧会のあと、一般の来館者に開かれた。

08年の日仏交流150周年を祝って両国の地方間交流を進めているフランスのジルダ・ル・リデック駐日大使を迎えて、12月初めに開館の記念植樹を行った。クリチャーヌ夫人とともに訪れた大使は、館内の展示を見て「フランスにもこれほど大がかりなものはないのではないか。目で見て楽しめる。教育面にも役立つ博物館だと思う」と印象を語った。大使は、ここを舞台に日仏の文化交流が進むことにも期待を示した。仏モンペリエ大学との交流を推進してきた井上富江教授の案内で植樹式に臨んだ大使は、身の丈ほどのアーモンドの苗木を博物館の西洋庭園に植えたあと、学内での「学生・市民と語る会」に出席した。帰京後には、博物館のカフェに「それ

はよい香りだ」を意味する「サ・サンボン」という名前を付けて書き送ってくれた。

「大分香りの博物館」は学校法人別府大学の創立100周年記念事業の一環として総工費5億円を投じて完成した。大学と並ぶ施設で、西村理事長が館長を兼ねる。香料の種類や調合方法を展示した「香りファクトリー」、世界の香水を様々な香水瓶とともに見せる「香水ギャラリー」、古代エジプトからアールヌーボー、アールデコに至る「香りヒストリー」と、多彩な展示が繰り広げられている。入館料は大人500円、大学・高校生300円、中・小学生200円。(いずれも団体割引あり)。開館時間は10:00～18:00時、火曜定休。

「サ・サンボン」は、喫茶と軽食。湯布院のMURATA特製のチーズケーキを別府市で食べられる店として人気を呼んでいる。英国風のガーデンがあるので、落ち着いたデートコースになってもおかしくない。



The fruits of my one-year study programme in Britain

Yumi Kono

“Would you like a drink?” This was the first question I was asked by my British housemates in Winchester. I answered “I have water.” Then she brought me a glass of water. I was surprised very much and knew that we could not communicate because of my poor English.

Next morning, I dared to go to the kitchen to try to speak to my housemates. I was so nervous and upset that I could not speak a word of English. However, Sarah, one of my housemates, was so kind and made me a cup of English tea, which was the first English tea I had in England. The warmth of the tea reflected the warmth of her heart and I relaxed. I will never forget that tea. Although all my housemates were so nice to me, I had difficulty understanding what they were saying. This made me very uneasy and even homesick. I felt strongly the necessity of improving my English skills.

The core of my studies were the classes. Debbie and the other teachers were experts in teaching English as a Foreign Language. My classmates and I were so lucky to be taught by such wonderful teachers. The vocabulary tests and presentations were tough, but very helpful in improving our English. My housemates were also helpful. Every

time I had hard homework, Sarah kindly helped me. I was grateful for her constant support.

I belonged to the university volleyball team. I enjoyed playing volleyball with my teammates twice a week. During the Easter holiday our team went to Spain. It was a long (22 hours) journey and we were very tired, but we had a lot of fun talking about many topics on the bus in English, of course! I was exposed to various kinds of English spoken by different British students. These volleyball activities turned out to be excellent opportunities for me to improve my English.

My housemates were so nice not only in the accommodation but outside of the campus. For example they invited me to their homes during the Christmas and Easter holidays. I spent 4 days with Sarah's family as if I were a member of their family. After such special days with a British family I found myself speaking better English than before.

For the last few months the Beppu students studied harder for graduation, which accelerated our ability in speaking, reading and writing English. Before I left Britain I found myself speaking English freely with my British teachers and friends. I became quite another person!

I am confident that I acquired not only a much better knowledge and proficiency in the English language but a wider and deeper knowledge of British culture in general.

Finally, I can say that another fruit of this one-year study program in Winchester was making many good friends in Britain.



写真左端が河野さん。右はサラーさん姉妹

好循環の交換留学

河野さんたちが英国で学んだこの留学制度は、ウィンチェスター大との協定により、当方の英文学科生と先方の日本語学科生を6人ずつ半年間、交換留学させる仕組みとして1997年に始まった。途中で日本語学科が廃止されたため一時はこちらからの留学だけとなっていたが、04年度から新たに日本で英語指導助手（ALT）を目指す英国人学生の受け入れコースとして交換留学の形が復活した。先方の英文学科生を本学の英文学科に迎え、英語教授法や音声学などを教授して明豊中・高校と明星小学校での教育実習を行う。過去3回実施し、08年度は4月に4名がやって来る。

今回英国留学記を書いてもらった河野さんたちのグループ13名は、この4名とは向こうで既に知り合っ

ているわけで、半年ぶりの別府での再会となる。9月に渡英する新年度の留学生にとっては、それまでの間、事前の学習を助けてもらえる相手となる。さらに好都合なことには、先方の4名は秋には帰国するので、今度はウィンチェスター大での世話役にもなってもらえる。これは得難い好循環で、この制度の大きなメリットだ。

こちらからの留学生の様子は、毎月1度の手書きによる近況報告の手紙を義務づけて、各自の和文の筆跡などからその精神状態も伝わって来ようとしている。先方の担任教授の携帯電話やEメールを通じて、24時間体制のホットラインもできている。安全であっての安心できる留学である以上、「連絡は命」をモットーに実践してきたことを強調しておきたい。

（英文学科長・教授 上田 見二）

日本語弁論大会で洪さんが最優秀賞

2007（平成19）年12月15日に大分市のコンパルホールで開催された「留学生による日本語弁論大会」（大分地域留学生交流推進会議主催）に別府大学から4名の学生が出席し、中国から留学中の英文学科3年、洪莹莹（コウ・エイエイ）さんが最優秀賞と会場審査員賞を受賞。韓国からの短期留学生、李鐘徹（イ・ジョンチョル）さんが優秀賞を受賞し、中国から国文学科2年に留学の李海燕（リ・カイエン）さんと韓国の短期留学生、呉敏錫（オ・ミンソク）さんが優良賞を受賞しました。6大学・工業高等専門学校、5ヶ国からの13名の弁士がさまざまなテーマで弁論しました。また、韓国、中国、タイからの留学生によるアトラクションもあり、本学の李佳嶸（リ・カエイ）さんが中国の伝統的な踊りを披露してくれました。

以下に収録したのは洪さんと李鐘徹さんの弁論です。

「旅を続けていこう」 洪莹莹

私の母国中国には、「10000里を旅することは、千冊もの本を読むことより役に立つ」という有名な話があります。つまり、どんなにたくさんの本を読むよりも、実際に足を運んで自分の目で見るほうがずっとよい勉強になるということです。

皆さんも、小さな頃から世界を駆けめぐることを夢見た人が少なくないと思いますが、今までの人生で、どのぐらい旅をしたか測ったことがありますか。

私の歩んできた距離は4500キロメートルになりました。

私の旅の出発は、故郷、中国の福建省のアモイからでした。18歳になろうとしていた、その頃の私は無口で卑屈な性格でした。私はそんな自分が嫌で、何とか変えようと思って、反対の声をおしきって、大学に進学するのをきっかけに、

故郷を離れる決意をしました。

最初に到達した駅は、アモイから2200キロメートル離れた古都「西安」でした。この長い歴史を持った文化的な町は、私にとって、何かと魅力的な感じがしました。幸い、西安外事学院に合格することができ、最も関心があった日本語を選ぶことで、日本との縁が始まりました。新しい環境の中、勇気を出して、たくさんのチャレンジをしました。努力した甲斐があって、私は先生方からもクラスメートからもいい評価を受け、少しずつ自信が持てるようになりました。

2005年、私は自信と希望を胸に抱きながら、大都市上海に出ようと決意しました。国際的大都市上海は、自分を試すチャンスに満ちています。社会人になってそこにたたく自分をつりかえたとき、あらためて、自分だけでなく家族に対する責任も感ずるとき、「これから精一杯頑張らなきゃ」というすごい圧力（プレッシャー）を痛感しました。それと同時に、「私にはまだ何か足りないものがある」という意識も強くなってきました。この厳しい生存競争に打ち勝つために、日本へ留学して英語を勉強しようと決意しました。

2007年3月、国境を越えて、長い間憧れてきた日本に留学する夢をついに果たしました。それまで、会社員として平凡な日々を送ってきた私は、留学生活は、ただ単に勉強とアルバイトだけに終わることなく、多くのことを経験し、多くのことを学ぶまたとないチャンスだと思っています。そんな中で、何と言っても、10月上旬に熊本で開かれた「九州地区国際学生会議」に参加したことは大きな経験でした。私は、そこで、環境汚染に関する厳しい現状を聞いたり、活発なディスカッションを通じて、他の日本人学生や他の外国人留学生が環境問題について深く考え、その解決法を見いだそうとする真摯な姿勢に新鮮な驚きを感じました。

私たちのグループは、演劇で解決法をアピールしました。

「足を知る」。

この言葉の意味を伝えるために、スーパーマーケットで品物を「買う前に深呼吸して買う」-- 買う前に一呼吸おいで考える人--を演じました。

先進国である日本では、外国から来た私には、マスコミから民間団体まで、環境保全について多大な注意が払われていることを実感しています。「ごみの分別」とか「マイバッグ」とか、自然にやさしく、自分にできることから始めて、みんなで力を合わせて努力する姿を見て、目覚ましい発展とともに環境汚染が進んでいる私の母国中国も、見習わねば人の心まで汚染されていくと痛感しました。私は、中国に戻ったら、是非、この環境問題の解決のために貢献しようと思えました。

「私はオタクです」 李鐘徹

みなさん、私はオタクです。え？びっくりしましたか。

みなさんがイメージするオタクは何ですか。きっと外へ出ないで、漫画の本を読んだり、アニメを見たりする人だと思います。その理由で、人々はオタクについて悪く思っています。ではオタクの語源は何でしょうか。1983年にナカモリアキオという人が漫画雑誌に載せたのが始まりです。そして、漫画、アニメ、ゲームなど同じ趣味を持っている人たちが同好会をつくって、本格的に「オタク」という言葉が広まりました。

いま、オタクは2つの意味で解釈されています。一つは自分の世界に閉じこもって社会と断絶している人たちという悪い意味で、もう一つは自分たちが興味のあることを一所懸命に研究する人というよい意味です。私はいい意味で解釈しています。もちろん、程度が過ぎる人たちもいて、その人たちはいま、「引きこもり」とか「ダメ人間」とか呼ばれています。しかし、その人たちの長所を生かして導い

私にとって第3番目の大切な駅、日本。私の人生のテーマに気付かせてくれた日本に感謝しつつ、私は次の旅に出発しようと思います。



左から右へ呉敏錫さん、洪莹莹さん、李海燕さん、李鐘徹さん

てあげれば、だれよりも立派な社会人になることができると思いませんか。

例えばお金のためにおもちゃ会社で働く人と、人形がとっても好きな人、つまり人形オタクがおもちゃ会社で働くのを比べます。お金のために働く人は、時間が過ぎるだけで仕事が退屈で能率が上がりません。しかし、人形オタクは趣味が仕事になるから楽しく仕事ができます。そして多くの時間を使って研究しますから、素晴らしいおもちゃをつくることができます。実は、日本で有名な漫画家の手塚治虫もオタクだと言われています。ですからあんなに素晴らしい作品を残したのだと思います。

(中略)見て楽しんで終わるだけの人よりも、研究して新しいものを作り出そうとするオタク。そういうオタクの方がもっと生き生きと見えます。みなさん、自分がオタクということは恥ずかしくないです。自分が好きな分野を堂々と自由に話しましょう。私は自分が好きな仕事をして生き生きと楽しく生きている人が人生の成功者だと思っています。

「進路支援システム」が学生支援 GP に

1. 学生支援 GP とは

学生の人間力を高め、人間性豊かな社会人を育成するため、各大学・短期大学・高等専門学校における、入学から卒業までを通じた組織的かつ総合的な学生支援のプログラムのうち、学生の視点に立った独自の工夫や努力により特段の効果が期待される取組を含む優れたプログラムを選定し、広く社会に情報提供するとともに、財政支援を行うことで、各大学等における学生支援機能の充実を図るものです。全国の短大 434 校中、別府大学短期大学部（地域総合科学科）が 11 校の採択校の 1 校となり、平成 19・20 年度が補助対象期間となります。

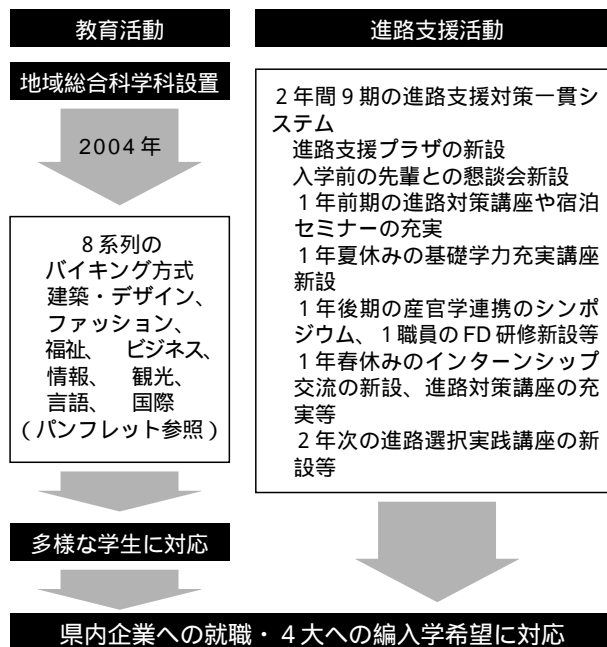
2. 本プログラムの概要

本学短大部の学生は、ほとんどが地元高校出身であり、卒業後は県内企業等への就職や大学への編入学を希望しています。また、最近、就職では即戦力となる人材が求められており、パソコンやコミュニケーション能力が重視されています。これらに的確に対応するため、本学では各種進路支援対策を講じてきました。今回の内容は、地域総合科学科のこれまでの対策の充実を図り進路支援対策の一貫システムを構築するものです。主な内容は、

大分校に進路支援プラザを新設し、進路支援の充実、情報検索のためのパソコン整備 入学前の学生に対する先輩との懇談会新設 1 年前期の進路対策講座や宿泊セミナーの充実 1 年夏休みの基礎学力充実講座の新設 1 年後期の進路対策講座の充実、先輩との懇談会、産官学連携のシンポジウム、教職員の F D 研修新設 1 年春休みのインターンシップ交流の新設、進路対策講座の充

実 2 年次の進路選択実践講座の新設等です。

プログラムの概要



3. 新たな取組の動機

短大は 2 年間という短い期間に教養、専門および資格を身につけた即戦力としての人材育成を目的としています。本学科も地域に開かれた短大として、県内の高校からの要請に応え、多様な学生に柔軟に対応できるよう、地域総合科学科構想にいち早く取り組んできました。また、地元産業界からの要望等により、資格取得対策や地域との連携の強化、インターンシップの充実などにも取

短期大学部 地域総合科学科教授 関谷 忠

り組んでいます。さらに、保護者や学生の要望による編入学対策にも積極的に取り組んでいます。しかしながら、こうした取組が効果を発揮するためには、教育・研究活動と学生の支援活動とがうまくマッチしたトータルなシステムの構築が必要であると考えことから、これまで実施してきた対策の不足部分を補い、より完成度の高いシステムの構築を目指して取り組むものです。

社会的ニーズや学生ニーズ等への対応

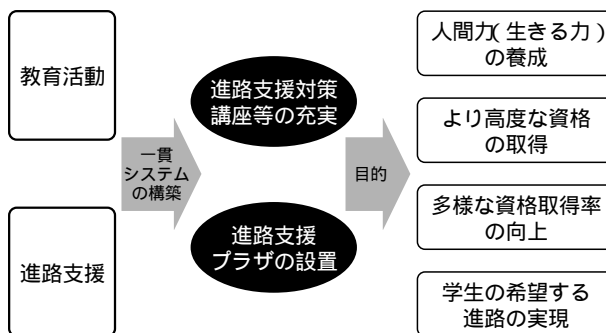


4. 本プログラムの独自性

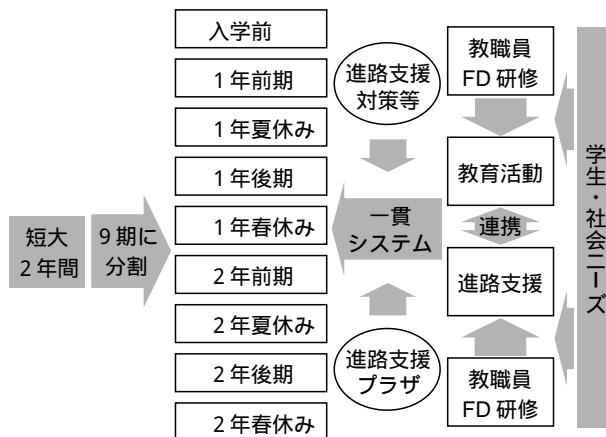
学生の多様なニーズに対応できるよう、短期大学生活2年間で入学前、1年前期、夏休み、1年後期、春休み等9期に分け、トータルできめ細かい進路支援対策を実施することにより、学生の視点からは、必要な時期に必要な支援がなされることとなります。また、進路支援プラザ新設により、留学生を含めた進路情報の一元化や学生の成績、資格取得状況、進路の希望、進路支援状況、受験結果などを記録した個人の「電子カルテ」の作成に

よる指導の効率化を図ります。特に留学生に関しては、生活指導面も含めたデータベースの構築により進路指導のより一層の充実を目指します。さらに、学生が自由に、いつでもパソコンを使える環境を整備することにより、進路選択が自由かつ積極的に行えるようにします。

新たな取組の趣旨・目的



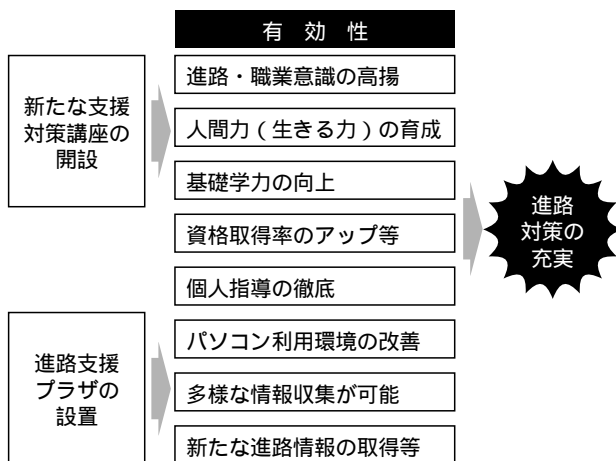
新たな取組の独自性



5. 本プログラムの効果

(1) 期待される効果

新たな取組の有効性



新たな進路支援対策の実施により、現代の学生に欠けている進路・目的意識、職業意識、勤労意欲の高揚や資格取得・進路対策講座の充実を図ることができます。こうしたきめ細かい支援内容は、社会問題であるニート、フリーター対策にも有効であると考えます。また、「進路支援プラザ」の新設により、進路情報の一元化や学生個々人の「電子カルテ」作成による教員の情報の共有や指導の効率化等を図ることが可能となります。さらに「進路支援プラザ」への新たなパソコン 20 台の整備により、学生が自由に、いつでもパソコンを使える環境が整備され、進路に関する情報検索や進路選択に関する自主性・積極性の向上を図ることができます。

(2) 現在の支援対策との相乗効果

現在実施している支援対策の充実・強化策であり、これに加えて、「進路支援プラザ」や個人ごとの「電子カルテ」のハード・ソフト対策の実現は、現在の支援対策との相乗効果により、格段の成果をもたらすことが期待できます。

現在の支援対策の内容と効果

内 容	効 果
進路ヒアリング	学生の希望の把握と個人指導の徹底
基本的検定資格	パソコン・秘書検定資格の取得
基礎学力向上	国語、社会、小論文等の基礎学力向上
インターンシップ	就業体験による働くことの意義の理解
地域行事等	社会性や人間関係形成能力の向上
基礎学力対策特講	進路に応じた基礎学力の向上
上級・専門資格	上級・専門資格取得によるキャリアアップ
資格取得講座	各種検定資格の直前対策講座
進路支援	きめ細かな個人指導による進路の実現

新たな支援対策の内容と効果

内 容	効 果
先輩との懇談	目的意識、職業意識、責任感の高揚
進路対策講座	自己表現能力の育成
教養講座	マナー・思いやりの心の習得
合宿セミナー	先輩から有益な進路情報等を取得
基礎学力充実講座	国語、社会を中心に基礎学力の向上
接遇研修	仕事上の基本的な礼儀・作法の習得
S P I 講座	言語・数的処理能力の向上
産官学シンポジウム	進路意識、人間力(生きる力)の育成
インターンシップ 国際交流	国際感覚・人生観の育成、相互交流
進路選択実践講座	進路情報検索と受験指導の徹底

進路情報センターから

3年次生の就職活動が本格始動

「2008年学内企業等説明会」開催

2月4日(月)に本学の就職支援の柱であり、3年次生の就職に向けての本格的な活動のスタートを後押しする、就職面接会を開催した。

学生は、3号館ホールで、実施要領の説明と注意を受けたあと、各企業、団体ごとのブースを訪問した。仕事内容や社風について説明してくれる貴重な機会。学生は自分の思いの企業を回って、直接企業の方から会社の概要や普段なかなか聞けない話を聞き、疑問点を質問するなど、本格的な就職活動を始めるうえで大いに役立つ説明会であった。

今回は、金融機関、医薬品会社、警視庁など38企業・団体からの参加を得た。また、ジョブカフェ(若者就職支援機関)、大分県福祉人材センター(福祉職場相談機関)、東京アカデミー(公務員・教員受験相談)などの団体からも参加協力があった。



「毎日就職EXPO」・「リクナビ・LIVE九州」が福岡ヤフージャパンドームで開催

毎日コミュニケーションズ主催の「毎日就職EXPO」が2月6日(水)福岡のヤフージャパンドームで開催され、本学からバス6台に分乗して217名の学生が参加した。

また、本年度からリクルート主催の「リクナビ・LIVE九州」が2月12日(火)同じ福岡のヤフージャパンドームで開催され、139名の学生が参加した。予想を上回る参加人数であった。

これらの合同説明会は、500社以上の企業が参加する、九州では最大のイベントである。学生にとって直接企業の人から話を聞ける絶好のチャンス。みな真剣に各社のブースを回っていた。



「一般常識模擬テスト・SPI能力模擬テスト」実施

2月5日(火)に、3年次生を対象に就職試験に欠かせない「一般常識」と「SPI能力」の模擬試験を行った。

社会人としての基礎教養、知識を有しているか判断する一般常識試験に133名の学生が受験。また職務遂行に必要な基本的な知識や知能を判断するSPI試験を103名の学生が受験した。

「公務員合格者体験報告会」2月4日(月)に開催

本年度公務員試験合格者2名(4年次生)が、一次試験の傾向と対策、学習方法、特に不得意科目克服法などを中心に自分の体験談を報告し、その後、3年次生から個別に相談を受ける機会をつくった。

なお、参加者は20名であったが、大変有意義であったとの声が多く聞かれた。ちょうど、公務員対策講座(期)が開講されており、これからの取り組みに参考になったとのことであった。

国際セミナー(冬期)・食物栄養科学生と 国際セミナー留学生との交流会

短大 食物栄養科

平成20年2月6日に韓国の留学生(白石大学・釜山経商大学・普州国際大学校・京東大学・国立順天大学校・金鳥女子高校・仁済大学校・威徳大学校)68名と短期大学部食物栄養科の学生との交流会が開かれました。

留学生の方々は、日本語や日本事情、日本文化について研修・体験する目的で本校に滞在しています。交流会は食物栄養科らしいおもてなしということで、大分県の郷土料理の「とりめし」「だんご汁」を一緒に作り、大分の名産「カボスゼリー」と、地産のサツマイモで作った「スイートポテトケーキ」を試食してもらいました。交流会は、食物栄養科の学生が歓迎のための計画を立て、学生の自主的な運営で進められ、大分の郷土料理と一緒に調理したり、自己紹介やゲームで親睦を深めていました。

留学生は日本にとっても興味があり、何事にも積極的に自分の意見を発言し行動する姿に日本の学生がとても刺激を受けていました。

留学生の感想としては、「短い時間に、だんご汁やカボスゼリーを堪能でき、郷

土料理がたいへん美味しく、大分県の郷土料理の名前を覚えることができた」「韓国ではおむすびをあまり作ることはなく、上手にできなかったが、教えてもらいながらとても楽しかった」「だんごをのぼすことが大変良い経験になった」など、趣向をこらしたもてなしや楽しいゲームで触れ合いができ、感謝しているとの感想でした。

日本の学生が韓国の食文化や生活・習慣等に触れる機会が少ないので、このような行事を増やして国際理解を深める機会を多く持ちたいと思います。



保育科学生のおペレッタ

2月8日(金) 別府大学大分キャンパスの文化ホールで、保育科1年生(69名)によるおペレッタが発表された。1年生はA・Bの2クラスからなり、各クラス4グループに分かれて異なる演目を演じた。最小グループは4名から、最大では12名のキャストで構成され、「ヘンゼルとグレーテル」「白雪姫」「小人の靴屋」「三匹の子ぶた」「三匹のクマ」が演じられた。

学生たちは、音楽表現技術の講義の中で、仲嶺まり子教授の指導のもと、今年に入ってから練習を積み重ねてきた。1月末までは後期試験が行われていたため、本格的な準備を始めたのは2月に入ってからということであったが、それぞれのグループは熱の入ったおペレッタを見せてくれた。

保育科学生は、保育、幼児教育に関する様々な知識・技術を日々学んでいるが、今回のおペレッタでは劇を演じる演技力のみならず、音楽を奏でたり、歌を歌ったりといった音楽的能力や、ダンスを踊ったりという身体的表現力も遺憾なく発揮していた。どのおペレッタも観ている者が楽しく、また時には大笑いを誘うような演出が

こらされており、3時間あまりの発表時間は、あっという間に過ぎていった。

このおペレッタでことに目を引くのは、キャストの衣装や舞台装置の大道具や小道具である。これらは全て学生たちの手作りで、色とりどりの画用紙やビニールを駆使して、それぞれの舞台の雰囲気七十二分に盛り上げるのに一役買っていた。学生たちはこれらの準備をする中で、クラスメートとの親睦を深め、おペレッタを演じる中でお互いの知られざる魅力を発見するという貴重な体験をつんだようだ。



青空に揚がった凧、凧、凧

2月10日、別府スパビーチにて毎年恒例の初等教育科・保育科学生による凧揚げ大会が開催されました。初等教育科1年生、専攻科初等教育1、2年生、保育科1、2年生、総勢約300名による70基ほどの凧。なかなかの壮観です。今年は、めじろんが多く見られましたが、なかなか飛ばないめじろんもいて、気をもませました。毎年参加してくれる凧揚げ名人の凧も、めじろんでした。保育科1年生は、連凧を作成したのですが、100基ほどがつながった連凧は、クラスの団結を表すかのようにしっかりとつながったまま空に舞い上がっていきました。学生たちは、自作の凧を少しでも高く揚げようと必死で走り回り、この日の空のように輝いた笑顔を見せていました。今年の最優秀賞は、初等教育科は専攻科2年製作

の立体凧、保育科2年Bクラスの平面角凧でした。



第27回ミュージックフェスティバル開催

学生・教員一体で合唱と感激の一日

短期大学の第27回初等教育科・保育科ミュージックフェスティバルが07年12月22日(土)大分キャンパス文化ホールで行われました。この行事は、保育士や教員を目指す両科学生たちの日頃の音楽的教育の成果を示すものです。

学生はクラスごとに思い思いの衣裳や演出で歌唱力とともにアイデアを競いました。当日は教員の合唱もあり、それには両科の学科長が扮したサンタクロースも登場し、笑いを誘いました。フィナーレの「小さな世界」の全体合唱では舞台と観客席が一体となって感激のうちに幕を閉じました。

日頃、ピアノの指導をいただいている非常勤の藪菜穂美先生のピアノ演奏(リゴレットパラフレーズ)と中川

国生先生のバリトン独唱「音楽に与す」他もあり、この催しに花を添えました。



「ヒロミチお兄さんと遊ぼう」

“歌って踊って会場大盛り上がり...!”

新年早々の1月12日、テレビでおなじみの“ヒロミチお兄さん”が別府大学にやって来ました...。創立100周年記念事業の一環として、短期大学の初等教育科と保育科が合同で開いた「ヒロミチお兄さんと遊ぼう」です。会場は別府アリーナを使わせてもらいました。

午前中は付属の幼稚園や保育園、一般参加の親子約600名が、TOSテレビ大分で放送されている「トスキー体操」など、親子でのふれあい遊びを存分に楽しみました。お父さん、お母さんにぶら下がったり、背中に乗っている子どものたちの笑顔はキラキラ輝いていました。

また、午後は総勢550名の初等教育科・保育科の学生を対象に、保育現場で活かせる体操やダンスなど、予定時間をオーバーしてたっぷり教えていただきました。

子どもの頃からあこがれていた“ヒロミチお兄さん”を前にして、未来の保育者・教育者たちも、子どもたち以上に生き生きと飛び跳ねながらも、真剣に取り組んでいました。

エンディングでは、ヒロミチお兄さんから「内面の輝く保育者になって欲しい」と熱いエールをいただき、午前、午後共に大盛り上がりでした。



スポーツ、芸術・文化の奨励賞

9団体、65人が受賞

恒例の「学校法人別府大学スポーツ奨励賞、芸術・文化奨励賞授与式」が2月21日、大学の500番教室で行われました。

この奨励賞は、柔道、剣道、弓道、アーチェリーなどスポーツ競技や絵画、書道、文芸などの芸術・文化部門の大会で九州、西日本、全国、そして世界で優秀な成績を収めた団体と個人に贈るもので、今回(2007年度)の受賞は学園全体で9団体と個人65人にのぼりました。

スポーツの部では、なぎなた部(大学・短大)、男子卓球部(中学校)、女子卓球部(同)が全国大会準優勝を、個人の部では明豊高校の甲斐義和選手が卓球ジュニアサーキットフランス大会ダブルスで見事優勝を果たして受賞しました。

芸術・文化奨励賞・団体の部は、高校のインターアクト部が日ごろの福祉ボランティア活動を評価され、内閣総理大臣より全国善行青少年団体賞を贈られたことで受賞。個人の部では、高校の鈴木絵里菜さんが将棋部門で全国3位、明星幼稚園の武井士恩くんが美術部門で全国教育美術展特選に選ばれるなど、多様な部門で素晴らしい活躍がありました。

授与式の挨拶で西村駿一理事長は「奨励賞の受賞者が年々増えていることを誇りに思う。学園創立100周年の今年、全国で、また世界で活躍する選手、生徒がこの学園から生まれてくることを大変うれしく思う

とともに、今後、1人1人の力をチームの力に、そして学園の大きな力にして、この100周年に素晴らしい花をみんなで咲かせていきたい」と述べました。受賞者を代表して、なぎなた部の佐藤美穂子さん(大学・芸術文化学科4年)が「荣誉ある賞を受けることが出来たのも、恵まれた環境の中で日ごろから指導して頂いた監督や、温かい声援を送って頂いた関係者の皆さまのお陰だと思っております」と感謝を述べました。

奨励賞は、運動面と文化面の多様な活動を通じて学園の誇りとなる人たちを育てる一助になっています。



明豊だより

野球部、センバツ初出場 「春の使者」に沸く

明豊高校野球部に1月25日、第80回記念選抜高校野球大会出場のお知らせが届き、3月22日から始まる春の甲子園に初めて出場することになりました。学校法人別府大学創立100周年に花を添えた快挙に喜びもひとしおです。

07年秋の大大分県大会では、安定した投手力と強力打線が爆発し、優勝しました。鹿児島で行われた九州大会でも準決勝まで圧倒的な打力で勝ち進み、投手戦となった決勝の沖縄尚学戦では相手得点を1点に抑え、見事に初優勝を遂げました。

野球部は1999年の開校と同時に創部。それから9年の間に夏の甲子園に2回出場し、初出場の2001年にはベスト8まで勝ち進みました。

部員は現在55名(2年26名、1年29名)。多くが寮生活を送り、集団生活の中でチームワークの大切さを体得しています。特に、大悟法久志監督が指導する本校野球部は「野球道は人格の形成にあり」の信念のもと、勉学と両

立させながら、野球の技量ばかりでなく、別府市内の清掃活動を行い、感謝の心と社会でたくましく生きる人となるよう努めています。

甲子園に向けては「守りの堅いチームづくりに努めている。ある程度打たれたり、エラーが出たりするのは仕方がないが、ここぞというときに守れるチーム、ここぞというところで放れるピッチャーになって欲しい。ゲームをものにするためには、守り合いに競り勝つことが大事だ」(監督談)

金沢主将は「秋の大会に勝つに連れ、みんなの気持ちが一つになり、集中力のあるいいチームになりました。全国制覇を目指します」と決意を語ってくれました。

このような栄誉が得られたのも、学園、後援会、同窓会、地域社会、父母の方々はじめ、関係者の温かいご支援の賜と感謝しています。甲子園で明豊野球を存分に発揮し、高校生らしいはつらつとしたプレーで応えたいと思います。



こちら看護科

明豊高等学校看護科は平成14年4月に、5年一貫で看護師を養成する専門学科としてスタートしました。その看護科も今年度で7年目を迎え、教育内容の工夫・検討を行い、更に看護教育の充実をはかっているところです。5年一貫の看護科は、3年間の高校基礎課程と2年間の専攻課程から構成されています。多様な看護師養成コースの中で最短の道です。

目的意識を持って充実した学校生活

看護科に学ぶ生徒の多くは、中学までの生活体験の中から看護師への強い志望動機を持ち進路を選択していますので、積極的に授業に取り組んでいます。高等学校1年生から専攻科2年生まで5学年が看護師になる夢に向かって学んでいます。

カリキュラム、補習、講師陣の充実

高校1年生から国語、数学などの一般教養科目（高校卒業の資格に必要）および看護の専門科目を勉強します。5年間で段階的に知識・技術が身につくように充実したカリキュラムを組んでいます。特に低学年では感性を育て、基礎・基本を大切にしたいきめ細かい教育を進めています。看護師になるための学習量は膨大ですから、夏季・冬季セミナー、7限補習、土曜日補習などを授業を補う形で実施しています。また、日々高度になる医療に対応するため、看護科の教員に加え

て医師会や大分大学医学部等より医療の最先端で活躍されている医師を迎え、講義をしていただいています。

勤労観・職業観を育てる臨床実習

看護の理論と実践を結びつけ、統合した教科として臨床実習があります。医療施設での実習を経て看護の喜び、楽しさ、苦しさ、そして看護の意義について学びます。終了後は実習報告会を開いてお互いの体験を共有しています。（高校2年2週間、3年生8週間、専攻科1年生8週間、専攻科2年生12週間）

専門性・自主性を重んじる専攻科

専攻科では解剖見学実習を初めとして、より専門的な学習を積み重ねています。国家試験に向けて模擬試験はもちろんのこと、ゆふの丘プラザでの宿泊合宿なども実施しています。また学校生活では自治会メンバーが中心になって親睦遠足、国家試験激励会など専攻科独自の行事を企画・運営・実施しています。海外研修旅行では、その国の文化・伝統に楽しく触れながら、保健医療の現状について学びます。

平成19年3月には初めての卒業生を送り出すことができました。それぞれが地域医療や高度医療の最先端で活躍しています。そして、この3月には2期生が5年間学んだ校舎から巣立っていきました。昨年同様

100%の就職率で大分大学医学部附属病院や東京医科歯科大学医学部附属病院など、県内外での活躍が期待されています。

平成 19 年 3 月卒業生就職先

- 【県内】 大分県立病院、大分大学医学部附属病院
大分赤十字病院、大分中村病院、大分岡病院、
大分東部病院、大分三愛メディカルセンター
新別府病院、黒木記念病院、中村病院、
別府発達医療センター、畑病院、石垣病院、
岡田眼科医院、国東市民病院、
杵築市立山香病院、公立おがた総合病院
湯布院厚生年金病院
- 【県外】 東京慈恵会医科大学附属病院
虎の門病院、順天堂大学医学部附属病院、
北九州総合病院、神鋼病院、
刈谷豊田総合病院、日本鋼管病院、
- 【進学】 聖マリア学院短期大学専攻科（地域看護学専攻）

高齢社会を迎えて看護職への期待はますます大きく、看護師養成への社会のニーズも拡大していくことでしょう。明豊高等学校看護科はこれからも時代の求める看護のエキスパートを育ててまいります。

臨床実習を前に高校 2 年生では戴帽式を行っています。校長先生よりナースキャップを戴き、ナイチンゲ



体育館での厳肅な
戴帽式の様子
(H19年 11月)



ール像から「愛のともし火」を受けた生徒はナイチンゲール誓詞を唱和。さらに一人ずつ看護を志す者としての決意を述べます。ナースキャップは看護師としての資質が認められて初めて戴けるものです。入学した看護科の生徒たちはこの日を目標にして日々努力しています。

百人一首かるた大会151人が参加

新年が始まってすぐに、明豊中学校 151 名が体育館に集まって百人一首大会を行いました。まだまだ寒い季節の体育館ではありましたが、会が始まると生徒の熱気で寒さなど忘れてしまうほどでした。まず学年別に予選を行い、各クラスから男子 1 名女子 1 名を選出しました。そして男子 6 名女子 6 名で決勝戦を行いました。決勝戦では 1 年生であっても 3 年生と対戦することになり、一所懸命奮闘する姿が見られました。

この会が開かれるまで、年末から年始にかけて、国語の時間を通じ何度も練習を重ねてきました。練習を重ねるたびに生徒達は自分の好きな一首を見つけるようになりました。そして上の句を詠めば、下の句を暗唱できるようになりました。その好きな一首を選ぶのも、歌意を気に入る生徒、偶然その歌枕を知っている生徒、あるいはただ古文の言い回し、古文の音律を耳で聞いて気に入る生徒とさまざまです。百人一首はこれまで触れたことのない古典の音律を耳で聞いて、目で見て、そして取るという作業なので、普段の机上での学習とはまるで異なります。しかし、生徒の反応、あるいは学習している姿を見ていると、とてもよい教材だと思わざるを得ません。生徒が暗唱していく歌の数は昨年より今年の方がはるかに増えていたように思います。

今では百人一首をするというご家庭は少ないのでは、と思います。そのような中、日本の伝統文化に触れ、体験すること。また中学校からはじまる古典文学の学

習の導入として百人一首大会をはじめました。年々、生徒の関心の度合いは増しているように感じます。学年によっては自分の好きな一首をきれいに清書し、教室に飾ったりもしていました。この百人一首を通して、これからより日本の文化に触れる機会を増やし、国際社会に旅立とうとする生徒に、日本の文化の「心」を伝えていきたいと思います。



華とまめく 香りの文化

Musée des Parfums

大分香りの博物館



お問合せ先

大分香りの博物館

〒874-8501 大分県別府市北石垣48-1
(別府大学西隣)

TEL 0977-27-7272 FAX 0977-27-7575

<http://www.bepu-u.ac.jp/kaori>

開館時間

10:00～18:00 (カフェ・サロン・ボンは、～19:00)

副香体験、アロマ体験も楽しめます

特設 マンガ・アニメーションゾーンがあります

火曜日(4月1日より年中無休)

入館料 大人500(400)円 大学・高校生300(240)円

中・小学生200(160)円

()内は20名様以上の団体割引 障がい者割引5割(随行者1名)

学校法人 別府大学